

【タブレット端末を活用した「個別最適化された学び」 「協働的な学び」のためのカリキュラム開発】

調査の目的・問題意識

墨田区立文花中学校夜間学級では、近年、外国籍生徒の入学が増えており、外国籍を持つ生徒の中でも、日本語の使用に課題を抱える生徒の国籍が幅広くなっている。その結果、使用する母語も多言語化しており、その実態に即して対応することが求められている。

指導教材の導入と並行し、GIGAスクール構想を念頭に、生徒の国籍にとらわれず「個別最適化された学びの充実」「個人の学習活動から協働的な学びへつながる授業」を行うための、タブレット端末を活用したカリキュラム開発について取り組み、教職員の資質・能力の向上を図ることを目的とした。

創出した先進事例

◆実施に向けて検討・実施した方策

①【個別最適化された学び】

「導入」「解き方」「回答・解説」を加えた夜間学級版デジタル教材を作成し、タブレット端末による課題等の配布。

②【協働的な学び】

決められたテーマに対し、ロイロノート内で共同編集ができる機能を活用しながら話し合う活動の導入。課題への取組を教室に配備された大型モニターに表示し、生徒それぞれの解き方を発表し合うことを取り入れた授業。

③【カリキュラム開発】

教科別にタブレット端末を活用したカリキュラムについて、個別指導計画の導入。

◆生じた成果・効果

①夜間学級版デジタル教材を作成し、タブレット端末による課題等の配布をできるようにすることで、生徒は自ら学ぶことができるようになり、効率的に学習できるようになった。特に若い生徒はタブレット端末を活用した学習により、学習意欲が高まった様子が見られた。

②解き方・考え方を発表し合う授業を取り入れたことで、活発な意見交換をすることができた。解答の共有をすることにより、自身の解答と比較し見直すことで間違いに気づかせたり、生徒によって異なる解き方・考え方をしていることを共有することで深い理解に繋がったりすることができた。

③カリキュラムを管理するために個別指導計画を作成することで、授業者が入れ替わっても共通理解を図りながら指導を行うことができた。

◆課題

- ・作成したデジタル教材の蓄積を、継続的に行うことが今後の課題である。
- ・教材だけでなく、生徒の意見などをデータとして蓄積していくことで、さらに少人数授業の中でも、年度を超えた多くの意見に接することができるようにしていくことが課題である。

調査研究を踏まえた今後の取組方針

特別的教育課程において効果的である「個に応じたデジタル教材」を複数の教科で作成し、多様な学びを実現する手段としてのデジタル化を取り入れた授業の実施を目指す。授業後に生徒アンケートの実施を導入することにより効果を検証し、夜間学級として効果的な教材開発を行うことで、ICTを活用した生徒の学習活動の支援の在り方の先進事例の創出に取り組む。

令和5年度夜間中学の設置促進・充実事業 成果報告書

大田区立糀谷中学校夜間学級

【研究テーマ】夜間中学における教育活動充実に係る調査研究

【ねらい】

- ① 外国籍生徒の学習活動に有効なICT等の教材・教具を活用した効果的な教育活動について研究する。
- ② SC等の外部人材等を活用した、より効果的な教育相談及び教育活動について研究する。
- ③ 日本語学級のない本校において、効果的な日本語指導を行い、各教科における学力の向上と授業力の向上について研究する。

【本年度の取組】

① 学習活動に関する研修

10月、日本電子専門学校電子応用工学科学科長 仲田 英起 氏を招聘し、授業で活用できるJamboard、Googleスライド、Google Formsに関して活用事例と準備方法の研修を行った。

② 教育相談

各学期の中で1回ずつ、大田区のスクールカウンセラーである東 達彦 氏による1対1の生徒面接を生徒全員に行った。面接結果のフィードバックをもとに、個々の生徒が抱えている悩みや、これまでの人生におけるトラウマ等の状態を理解し、生徒一人一人に寄り添いながら「学び直し」を支援する方策について意見交換した。

③ 生徒全員面接後の教育相談研修

2月、夜間学級は慣れない異国の地でストレスフルな生活を余儀なくされている生徒が多いという課題があるため、大田区のスクールカウンセラーである東 達彦 氏から、自死企図と自傷行為の理解と対応に関して夜間学級教職員がレクチャーを受けた。大事なことは被援助希求性を高めることで、信頼できる大人につなげ、自分の正直な気持ちが話せるようにするのが目標であることや、具体的な接し方や言葉を学習した。最後に、一人で抱えないでチームを組み、多くの大人や地域で生徒を支えることが大切であることを学んだ。

④ 日本語指導に関する研修

9月。日本語初級教科書「大地」の作者 山崎 佳子 氏、町田 恵子 氏2名を迎えて、①外国語学習・指導の考え方・意識、②「大地」作成目標と編集方針、③日本語教育を体験しよう、④多様なタイプの練習問題の進め方、⑤練習問題の内容の深め方、⑥質疑の項目でレクチャーいただいた。③日本語教育を体験しようでは、実際に生徒役になり、生徒の立場を体験し進め方の配慮事項が大変よくわかった。また、内容の深め方に関しても、いろいろな視点をいただいた。

【本年度の成果】

- ・ ICT機器を活用し、視覚的な援助コンテンツを作成し効果的な日本語指導や教科指導を行うことができた。今後は生徒自身が活用する機会を増やすことに取り組みたい。
- ・ 一人一人に「学習カルテ」を作成し多面的に生徒を把握し、教科ごとの成果と課題をフィードバックしながら長所の伸長と弱点の克服に向けた学習支援の充実を図ることができた。今後は他教科との連携を模索したい。
- ・ SGとの関わりと研修を通して、生徒理解を深めながら教員としての「観察力」と「指導力」を養い、生徒にとってより良い環境を整えることができた。今後は既卒者で特別な支援が必要な生徒の増加が見込まれる。その対応に備えたい。

「夜間中学における教育活動の充実に係る調査研究」

調査の目的・問題意識

◆目的

- ①学齢の不登校生徒の学びの場としての夜間中学の活用について研究する。
- ②生徒の個別最適化に係る効果的な教育活動のあり方について研究する。
- ③高齢生徒の移動負担、体験活動等でより充実した教育効果を挙げ得る校外学習の在り方について研究する。

◆問題認識

- ①令和2年国勢調査において未就学者は約9万人、最終卒業学校が小学校の者は約80万人という結果が得られ、夜間中学の設置ニーズがさらに顕在化していること、またこれに加え、学齢期の不登校生徒等に向けた支援の一つとしても、夜間中学活用方法をさらに模索していく必要がある。
- ②国籍、年齢が異なることによる、個に応じた支援が必要。
- ③高齢生徒の増加、歩行困難な生徒の在籍、ヘルプマークの使用者などの特別な事情を持つ生徒への校外学習時の支援が必要。

創出した先進事例（目的・問題意識①に関連するもの）

◆実施に向けて検討した方策

- ・区内中学校に在籍する、不登校状態の生徒の体験的な夜間中学への通学。

◆検討した方策の分析

- ・区内中学校において不登校生徒が約1,200名在籍している。
- ・夜間学級の下校時刻が21時を過ぎることへの懸念。

◆実際に行った方策

- ・NPO法人カタリバを生徒の伴走役として配置する。
- ・体験生徒を最大3名までとする。

◆生じた成果・効果

- ・体験生徒の学校復帰や、自己肯定感の向上など、よい傾向が見られた。

◆課題

- ・体験生徒の決定に時間までの手続き等を円滑にする。
- ・体験頻度の差による他生徒との学習進度の差に応じた指導を行う。
- ・怪我や問題が発生した際の保険適応や、対応策について確立する。

創出した先進事例（目的・問題意識②に関連するもの）

◆実施に向けて検討した方策

- ・通訳者等を派遣し、授業は勿論、生徒の行事への積極参加を補助し、更には行事に生徒の意見を反映させることで生徒の学校生活、学校教育の充実に図る。
- ・生徒一人一台端末(Chromebook)を活用し、自主教材に準拠した日本語のデジタル教材の作成を行う。

◆検討した方策の分析

- ・各行事をはじめ、日本に入国したばかりの生徒に対して通訳のサポート等に活用できる。
- ・Google翻訳を活用し、各言語に対応する単語帳が効果的。紙ベースでは、想定していない母語の生徒が入学した場合対応できないため、デジタル単語帳を作成し、様々な生徒の母語にスムーズに対応できる。

◆実際に行った方策

- ・通訳の派遣
- ・デジタル単語帳の作成（指導テキストの課ごと）

◆生じた成果・効果

- ・初期の日本語指導にとっても効果的であった。
- ・単語のまとめ、派生語の入力など、生徒自身がカスタマイズできる単語帳とすることで、個別最適化した学習を実現した。

◆課題

- ・通訳は週1日又は2日の派遣のため、保護者面談や生徒指導等、さらなる調整が必要。
- ・万が一の誤訳を防止する確認作業に時間を要するため、母語に対応できる人材の確保が必要。

創出した先進事例（目的・問題意識③に関連するもの）

◆実施に向けて検討した方策

- ・校外学習（京都府、奈良県）において貸切バスを賃借することで、高齢生徒や歩行困難といった支援が必要な生徒の移動に伴うハンディキャップを減少させる。

◆検討した方策の分析

- ・移動に関し支援が必要となる生徒の負担軽減に繋がる。
- ・移動時間を減らすことでより校外学習に時間を掛けることが出来る。

◆実際に行った方策

- ・貸切バスの借り上げ
- ・バスガイドによる校外学習（神社仏閣、歴史）に関連する説明の実施

◆生じた成果・効果

- ・歩行が困難な生徒、高齢者にとっても効果的であった。
- ・貸切の副次的効果として、移動時間が減少し、より校外学習（見学箇所の増加や体験活動の組み込み、バスガイドによる説明）の機会を得ることができた。
- ・バスガイドの説明は、事後の壁新聞作成等、校外学習以外でも役立った。

◆課題

- ・校外学習を全額生徒負担とすると、夜間生徒数では交通費等、一人あたりの負担が大き過ぎるため、何らかの補助が必須となる。

調査研究を踏まえた今後の取組方針

◆「学び」の支援／「ICT」の活用 など

- ・区独自の取組として、不登校生徒の学びの場になる、夜間中学の活用体制の整備。
- ・日本語の学習コンテンツなどICTを活用した、個に応じた学びの支援体制を整える。

「夜間学級における教育活動の充実」

調査の目的・問題意識

◆目的

- ・ 知的障害等特別支援学級（固定学級）との交流を通して、パラスポーツの理解と共生社会の形成を目指す。
- ・ 昼間部通常学級、特別支援学級、夜間学級の3つの学級の生徒全員が、秋に実施される開校記念式典に参加し、お互いの立場を理解することで、これからの共生社会の担い手を育成する。
- ・ 本夜間学級は「東京都23区の中で唯一エレベーターが設置されている夜間学級」であることを広く告知することで、設備のために通学できなかった生徒への学習の場を提供していく。
- ・ 障害のある生徒が教育活動を行う上で、教育環境・設備面での障害を取り除くことで、学習意欲の増加と教育活動の充実を図る。

創出した先進事例

◆実施に向けて検討した方策

- ・ 本校には、知的障害等特別支援学級（固定学級）があり、30名強の生徒が在籍している。その特別支援学級の生徒とのスポーツを通じた交流（ボッチャ）を推し進めることで、パラスポーツを理解し、お互いを認め合う気持ちを芽生えさせ、共生社会の形成につなげていく。本校にはボッチャの用具がないため、区から借りるとともに、ボッチャの技術的な指導が必要な際には指導講師を招聘し、スキルアップを図る。
- ・ 本校は2つの区立中学校が合併し、そこに夜間学級が併設される形で令和5年4月開校し、充実した教育活動を行っている。本校にある昼間部通常学級・知的障害等特別支援学級（固定学級）・夜間学級の3つの学級の交流については、開校初年度ということもあり、十分な交流ができていない。そこで今秋に行われる開校記念式典に3つの学級の生徒が全員参加し、その代表生徒がそれぞれの学級についての「誓いのことば」を述べることで、お互いを認め合う気持ちを高め、心の成長を図っていく。
- ・ 本校は新設校であり、エレベーターが2基設置されている。4月に夜間学級に入級した生徒で、車いすで通学している生徒は、いくつかの夜間学級に入級の希望を伝えたところ、施設的な面での対応が難しく、十分な教育活動が保証できないと断られてしまい、結果として、エレベーターやバリアフリーが行き届いている本学級に入級することとなった。
また、5月には車いすを使用していないものの半身にまひの残る生徒も同様の理由で本学級に入級しており、今後も23区内において、他の夜間学級では対応できずに本校に長時間かけて通学する生徒の増加が十分見込まれる。そこで、今まで設備等の面で十分な学習機会を得られなかった生徒が安心して通学できるよう、本校の存在を広く広報することで、そのような生徒の教育の機会を増やしていく。
- ・ 3年生が参加する京都奈良への2泊3日の修学旅行や全校生徒が参加する校外学習において、車いすの生徒や半身にまひが残る生徒、高齢の生徒が交通公共機関を利用した移動をした場合、見学場所に着くまでに体力の多くを消耗してしまうことが十分に考えられる。そこで、生徒の移動手段に貸し切りバスを利用することで、その教育効果を検証していく。周りの生徒には、車いすの生徒へのサポートの役割を与え、お互い助け合う気持ちの醸成を図る。

「夜間学級における教育活動の充実」

創出した先進事例

◆実際にいった方策

- ・令和6年2月17日（土）の土曜授業の際に、本校の知的障害等特別支援学級（固定学級）及び、昼間部の通常学級の生徒とのポッチャ交流会を実施した。
- ・令和5年10月21日（土）に、本校において開校記念式典が行われた。本校にある昼間部通常学級・知的障害等特別支援学級（固定学級）・夜間学級の3つの学級の生徒会役員が、記念式典での「誓いの言葉」を分担して話すこととなった。それぞれの学級の国語科教員や生徒会担当教員が計画を練り、その内容を各代表生徒に指導した。
- ・東京都にある他の夜間学級では、施設的に受け入れることが難しい生徒の受け入れを積極的に行うために、公共施設や駅等にポスターを掲示した。また、区内の区立中学校に在籍している外国籍の生徒の進学先の一つとして、夜間学級を検討してもらえるよう、各中学校に本校夜間学級のポスターとパンフレットを配布・掲示した。
- ・3年生が参加する京都奈良への2泊3日の修学旅行や全校生徒が参加する校外学習において、生徒の移動手段に貸し切りバスを利用することを計画し、借損料を活用する予定でいたが、各行事において、教員同士が連携し、介助が必要な生徒の対応に当たる等の人的支援によって、今年度は費用をかけずに、同様程度の教育活動を行うことができた。

◆生じた成果・効果

- ・計画当初はポッチャの用具を借りることを検討していたが、他の夜間学級からも借りることができ、本学級でも1セット購入することで、多くの生徒が待ち時間なくポッチャを楽しむことができた。さらに、指導講師の派遣も検討していたが、教員同士の実技研修を積極的に行うことにより、教員の指導技術の向上を図ることができたため、講師の派遣は行わなかった。
事後のアンケートでは「楽しかったか」、「また交流を行いたい」の2点について聞いたところ、3つの学級のすべてにおいて、90%以上の生徒が「楽しかった」「また交流したい」と回答するという結果が得られた。
- ・開校記念式典で「誓いの言葉」を発表する代表生徒同士が、練習や打ち合わせを重ねるたびに、お互いのことを理解していき、昼間部通常学級の生徒が夜間学級の生徒に日本語を教えたり、夜間学級の生徒が通常学級の生徒に母国語を教えたりするなど、本校でしかできない交流の在り方を垣間見ることができた。特別支援学級の代表生徒とは、身振り手振りを加えながらお互いにコミュニケーションをとる姿が見られ、ともに生活する仲間意識が育まれた。最終的には、お互いを認め合う気持ちを一層高め、それぞれの心の成長を図ることができた。
他の生徒にとっても、本校には3つの異なる学級があることがだんだん浸透していきいている。たとえば、夜間学級の生徒も、昼間部の部活動へ参加し始めるなどの現象が見られ、共生社会への理解やその実現に向けた取組が、より推し進められるようになった。

「夜間学級における教育活動の充実」

創出した先進事例

◆生じた成果・効果

- ・入級希望者を昨年と比較してみると、昨年度は3月末時点の段階で、入級希望者が11名、入級に関する問い合わせが20件であったのに対し、今年度は2月末時点で入級希望者が12名、入級に関する相談者は30件を超えている。特に今年は、区内の学齢生徒の進学先に関する問い合わせが多くなっている。昨年度よりもより多くの、日本での教育が必要な方々に、夜間学級の概要を伝えられることができたと考えられる。こうした成果は、本事業の中で、ポスター及びパンフレットを作成し、地域の公共施設や公共交通機関の駅等に掲示し周知を行ったことが影響しているものと考えられる。

◆課題

今年度は開校1年目ということもあり、昼間部通常学級や特別支援学級との交流や夜間学級での教育活動を広く伝える広報活動に重きを置き、重点的に実施してきた。その点ではある程度の成果が見られていると考える。しかし、夜間学級での教育活動における大きな課題の一つとして「日本語指導」があげられる。教員は異動を伴うため、常に新しい教員が夜間学級での指導（特に日本語指導）を行うことになるため、教材の均一化や簡素化、視覚化が喫緊の課題となっている。

今まで夜間学級に携わってきていただいていた多くの先輩の先生方が作成された教材や、市販されている教材など、「日本語指導」を行う教材が充実しているように見えるが、それらの教材の使用には、高度な手法が必要となり、併せて、教員がやさしい日本語を使いながら指導を行わなければならないという課題がある。さらに、それらの教材のICT化、どの程度の日本語の習得によって上位のクラスや通常学級にクラス替えをするかといった、いわゆる「クラス分けテスト」のようなものの作成も必要になってくる。

今後は、そういった「日本語指導」に関連する教材の充実や教員の研修に力を注いでいかなければならないと考えている。

「不登校経験者（学齢生徒も含む）の支援の在り方」

調査の目的・問題意識

◆目的

- ・義務教育段階の学齢生徒についての不登校対策として、八王子市立第五中学校夜間学級における学齢生徒の体験入級を実施し、先進校の視察を含めた実証研究を進め、今後の不登校生徒の支援体制の充実に資する。

◆問題認識

- ・夜間学級において学齢生徒を含む不登校生徒を受け入れるにあたって、安全面の確保、教育課程や指導内容の工夫、相談体制の整備、施設・備品等の検討が必要である。

創出した先進事例

◆実施に向けて検討した方策

- ・学齢生徒の体験入級（体験入級の仕組みの構築、安全の確保、学校間の連携）
- ・体験入級の周知方法（チラシ、ポスターの作成、スクールソーシャルワーカー等との連携）

◆検討した方策の分析

- ・入級資格、在籍校や保護者との連携など、体験入級に向けては、既存の入級手続きだけでは全てを補うことができないため、新たな仕組みづくりが必要である。
- ・学齢生徒の受入れにあたっては、本事業の趣旨や目的に合致する対象者への正確な情報提供や支援が重要であるため、学校やスクールソーシャルワーカー等と連携し、体験入級の枠組みをつくる必要がある。

◆実際に行った方策

- ・学齢生徒の体験入級の周知及び実施
- ・「ミマモルメ」の試験利用による安全面の確保についての調査
- ・夜間中学において不登校経験者を受け入れる先進校の視察（群馬県立みらい共創中学校、足立区立第四中学校）

◆生じた成果・効果

- ・夜間中学において学齢生徒を体験入級という形で受け入れる仕組みを整え、不登校の生徒のための新たな支援メニューを創出することができた。
- ・「ミマモルメ」の試験利用により、保護者と連携した安全面の確保を具体的に進めることができた。
- ・学齢生徒の体験入級の周知を通して、市立中・義務教育学校の市立第五中学校夜間学級についての理解が促進され、不登校を経験した生徒の進路の選択肢としての認知が高まった。

◆課題

- ・学齢生徒の体験入級を開始したものの、実際に体験入級を行った生徒はいなかった。周知の内容やタイミング、実施時期を再検討する必要がある。
- ・学齢生徒を受け入れるにあたり、安全面の配慮や教育内容の検討、支援スタッフの配置等について、今後も調査・検討を重ねる必要がある。

調査研究を踏まえた今後の取組方針

◆夜間中学における不登校経験者（学齢生徒も含む）の支援・受入れを推進する

- ・中学校時代に不登校を経験した生徒にとって、夜間学級が学び直し場として認知され、機能するための支援内容や支援体制の在り方を検討する。
- ・不登校の学齢生徒が、夜間学級への入級を前提とする「体験入級」としてだけでなく、もとの中学校への在籍を維持しながら、夜間学級という教育機会を活用した指導や支援を受けられるような仕組みづくりを模索する。

【調査研究事項番号 IV】 川崎市立西中原中学校

研究テーマ「生徒一人一人の状況に応じた学習指導の充実について」

調査の目的・問題意識

【目的】

川崎市立西中原中学校夜間学級は、外国につながるのある者や既卒者による入学希望者が年々増加している。今後は入学希望者のニーズも一層多様化することが予測されることから、入学希望者が求める学びについて十分に確認し、必要な支援や多様な教育機会を提供することができるような工夫が必要である。そのため、入学前の見学や体験入学など夜間学級と教育委員会が連携して進めることが重要であり、その在り方について研究を進めていきたい。また、夜間学級に通学している生徒は、日本だけでなくフィリピン、中国、インド、ネパール、ベトナム等の多様な国籍を持つ生徒が在籍の多くを占めるほか、10代から60代の幅広い年齢層の生徒が在籍している。そのため、国語や算数・数学等の基礎的・基本的な学習内容の相違が大きく、日本語を含め、生徒の個々に応じた指導が必要である。生徒の状況に合わせた教材の在り方について研究し、生徒の資質・能力の育成を図りたい。

【問題意識】

夜間学級の入学希望者は、既卒者や外国につながるのある者など、様々な学びのニーズを持った者が年々増加する傾向にある。そのため、個々の学習のニーズを適切に把握し、それぞれの学びに応じたきめ細かな対応をしていく必要がある。

そこで、次のことを踏まえて研究を進める。

- 1 入学希望者に対し、夜間学級のねらいや入学後の学習について十分理解できるように、入学前の見学や体験入学における対応を丁寧に行うこと。
- 2 入学希望者について、教育委員会と西中原中学校夜間学級との緊密な情報共有を図ること。
- 3 教育委員会の事前相談や面談で学習状況の聴き取り、西中原中学校夜間学級における入学前見学や体験入学における希望者の状況把握などの情報共有を図ること。
- 4 体験入学で、入学希望者の学習の状況を把握し、個々に応じた入学後のカリキュラム編成等について検討すること。

実践事例

【実施に向けて検討した方策】

入学前見学や体験入学における聞き取り調査を行い、一人一人の学習ニーズを適切に把握し、学習指導の充実につなげる。

【検討した方策の分析】

入学前に聞き取りをきめ細かに行うことで、学習の段階を把握することができる。特に既卒者であっても、中学卒業の日本人や外国籍の高校・大学卒業者とでは学習の段階が違うこともある。特に外国籍の入学希望者については、日本語を学びたいと考えている希望者も多いため、日本語の取得状況によっては学習段階の調整が必要となる。そのことから、入学希望者とは体験入学や面談を実施することで、日本語の取得状況を把握することができ、入学後に「何を」「どこから」学習することが必要なのかを適切に把握することができる。そのようにすることで、国語以外の学習についてもどのように学習を進めれば良いかや教材の研究や工夫にもつながる。

【実際に行った方策】

入学前の面談を実施する際、「話す」ことと「書く」こと、また、「聞くこと（聞き取り）」の確認を行った。

日本語の習得状況が十分でない生徒に対して、日本語能力の向上を図るために、どのような指導が適切であるかについて夜間学級と教育委員会が連携し、夜間学級の教職員を対象に教育委員会教育政策室の人権・多文化共生教育担当指導主事などが講師として、日本語指導研修を定期的に実施し、日本語教育への理解を深め指導の向上を図った。

生徒の教材については、日本語指導研修講師や指導主事等が授業参観に参加したり、指導事例検討会を実施したりしながら個々の学習に応じた教材の検討・協議を行った。生徒の資質・能力の育成や学習の定着を目指し、教材(購入教材)を使用し、またそれを基に自主教材を作成した。

【生じた成果・効果】

成果・効果としては、入学前に生徒の状況を的確に把握することで、学習段階に応じてグループ別で学習を展開することができ、学習効率に大きく役立った。特に、外国籍であっても日本語の理解が進んでいる場合は、1年生からではなく、2年生や3年生からの入学を検討することができる。学習状況に合わせた授業を展開することで、学習効果を上げることができた。

さまざまな国につながるのある生徒が、現在生活している日本の文化を理解するために、講師を招聘しての書道教室、陶芸教室、教科と関連させてもちつき大会等を行い、伝統文化や日本の年中行事に触れる機会を設けた。また、文化祭等で自分の国を紹介する場面を設け、様々な国の文化を知り理解をすることで、多文化共生への理解を深めることができた。

【課題】

課題としては、学習状況に合わせてグループ別で学習を進めることで初めは学習の理解が同じでも、学習を進めることで徐々に学習への理解に差が生まれることである。

調査研究を踏まえた今後の取組方針

入学希望者への支援／効果的な面談の活用

入学を希望する者について、今後も生徒一人一人の状況を的確に把握することやきめ細かな面談を実施し、入学者のニーズに沿った学習支援ができるように努めていき、多様な生徒の状況に応じた学習内容や学習形態についての学習指導が充実するよう検討していきたい。

調査の目的・問題意識

◆目的

- ・生徒の学校行事への参加率を向上する。

◆問題意識

- ・三大行事（新入生歓迎集会、連合運動会、連合作品展）や校外学習への参加率が約10%で低い。

創出した先進事例

◆三大行事や校外学習への参加率向上について

三大行事や校外学習を通して、自校および他校の多くの生徒の交流を行い、他者との共通する部分や違った部分を知り、「多文化共生」、「相互理解」を学ぶことによって、学校生活に充実感を得ることができると考える。また、校外学習では体験活動に取り組むことで、日ごろの学習を深めたり日本の文化に慣れ親しんだりし、学齢期に十分学べなかった生徒や外国籍の生徒たちの学習意欲の向上につながると考える。

◆実施に向けて検討した支援

〈外国籍の生徒に対して〉

- ・交通費負担の軽減
- ・土地勘がないため個人で学校外の場所に集合することが困難な生徒への支援

〈高齢の生徒に対して〉

- ・交通費負担の軽減
- ・移動に関する体力的な負担軽減

◆実際に行った方策

- ・参加率向上に向けた取組として、学校行事の際に貸切バスを利用し、移動に対する経済的な負担、体力的な負担の軽減を図るとともに、安心して参加できる環境を整える。

◆生じた成果・効果

- ・行事の参加率は、貸切バスを利用すると高くなる傾向にある。
- ・三大行事（連合作品展は除く）や校外学習の参加率は貸切バスを借用すると約2倍になった。

調査研究を踏まえた今後の取組方針

◆「三大行事及び校外学習への参加」の支援

- ・貸切バスを使用する行事を厳選する。
- ・校外学習については、あまり費用の掛からない企画をする。

【調査研究事Ⅳ】 団体名 豊中市教育委員会

- ① 学齢期に十分学ぶことができなかったために自己肯定感が高まりにくい生徒の自尊感情を高める支援のあり方
- ② 日本語理解に課題のある外国籍の生徒の、自己実現に向けた支援のあり方

調査の目的・問題意識

◆目的

- ・「多様な背景をもつ生徒の自尊感情の回復・獲得」と「外国にルーツのある生徒の自己実現」

◆問題認識

- ・学齢期に学ぶことができなかった生徒の精神的な課題（自己肯定感や自尊感情など）をテーマとした取組は、なかなか直接的に視点のあたりにくい部分であるため、積極的な取組や研究が必要。
- ・生徒の背景が多様になる中、各種面談や進路懇談等に生徒が安心して臨むことができるような体制の構築及びその在り方の研究が必要。

創出した先進事例

多様な背景をもつ生徒の自尊感情の回復・獲得

【体験学習の充実】

- ▶新入生歓迎会、連合運動会、連合作品展
- ▶学習旅行（尼崎市 城めぐり）

⇒仲間との協働・協力、学校外での知見の広がり
級友との交流の深まり、日本文化に対する知見の深まり

【体験を自己表現】

- ▶総合学習発表会
- ▶各種作品展

⇒参加者の感想文を生徒に
フィードバック

体験学習の充実の成果と課題

～生徒アンケートより～

- 「友達が楽しんでいる姿を見て、自分も楽しくなれた。」
- 「学校にはない出来事があるのに気づかされてよかったです。」
- 「日本きて初めて遠足いきました。とっても楽しかった。」
- 「運動会頑張っています。最後の最後まで片付けをして帰ります。」
- 「I hope we can go to many other educational tour as we learned a lot of Japanese culture」

【今後】年齢等の理由で校外の体験学習へ参加できない生徒も多い。
そのため、校内でも体験的な活動を充実させていく

級友と楽しむことを
よしとする態度

自発的な社会奉仕の感情
普段の何気ないことに気づくことができる感受性

外国にルーツのある生徒の自己実現

【翻訳文書の活用】

難しい書類が関わる場面（年度当初各種オリエンテーション、就学援助受給申請支援、進路懇談等）で翻訳文書の活用

⇒日本語理解が初歩の生徒にとって安心感

【通訳者派遣】

入学希望者面談、検診、学期末懇談、進路に係る懇談時派遣。外国籍の生徒に対する確実な意思の疎通と丁寧な生徒理解を図る。

⇒安定した学校生活やきめ細やかな支援
卒業後の進路を見据えた支援につなげる

翻訳文書・通訳者派遣の成果と課題

翻訳文書：緊急連絡カード、個人情報に関する同意書、非常変災時の措置、学校への連絡に係る書面通訳者派遣
：入学希望者面談、総合健康診断、内科検診、学期末懇談、進路懇談

通訳者派遣実施後の生徒アンケート「通訳者はあなたにとって助けになりましたか」

「とても助けられた」…75%、「すこしは助けられた」…6%

「あまり助けにならなかった」…19%（ヒンディー語1名、アラビア語2名）

⇒使用言語に多種の方言が存在し、通訳者の方言とマッチングしていないことが原因

【今後】より幅広い言語に対応できるよう通訳者を確保し、適切な派遣体制の構築をめざす。

【 IV. その他夜間中学における教育活動充実に関すること 】

天理市立北中学校夜間学級

「大人の生徒にとっての効果的な校外学習の在り方」

調査の目的・問題意識

◆目的

○天理市立北中学校夜間学級には多様な背景を持つ生徒が集まっていることから、生徒の多様性に配慮した上で、社会見学や体験学習を通して、大人の生徒が効果的に日本社会事情を理解することを目指す。

○生徒の経済的負担、多様な違いを持つ生徒どうしの理解・共感・結びつきを深めること、識字日本語学習をしている生徒の言語習得状況等を考慮した校外学習の在り方などについて研究し、その成果と課題を分析する。

◆問題意識

○天理市立北中学校夜間学級には 2023 年 2 月 1 日現在 43 名の生徒が在籍している。戦争や差別、貧困・病弱・障害などで学齢期に教育を受ける機会を十分に保障されなかった人たちや、結婚などで主にアジア・南米から渡日した定住型の外国籍の人たちなどが学んでいる。また、2015 年 7 月に入学希望既卒者が夜間中学への入学を希望した場合の考え方が示されるとともに、2016 年 12 月に「義務教育の段階における普通教育に相当する教育の機会の確保に関する法律」（以下、「教育機会確保法」）が公布されたことで、入学希望既卒者への門戸が一層開かれた。本学級にも若干名ではあるが、家庭事情やいじめ等で学齢期に不登校になりそのまま中学校を形式的に卒業した人が、学び直しのために入学している。今後、本校でも他の夜間中学と同様、従来の層の生徒に代わって、こうした学び直しを希望する人たちの入学希望が増加していくと思われる。

○新渡日の外国籍生徒の場合、その背景として持っている文化、母語、価値観は、非常に多様であり、日本事情の理解のための社会見学や体験学習の実施も求められている。さらに、日本語使用に関する学習カリキュラムについては、まず、自分の身の回りの社会にアクセスできるようになるための生活言語の習得から始まり、その後に各教科学習に進むための基礎的な学習言語の習得へと進めるといった、順序立てた教育課程が必要になる。

○学び直しを目的としている生徒の場合、置かれてきた家庭環境・経済環境、十分に学校へ通うことができなかった原因・理由が生徒によって異なっている。そのため、それぞれの生徒の過去の人生経験へ十分に配慮しながら、社会見学や体験学習の実施、将来の生き方を見据えた進路指導と教育相談が必要であり、学習目的の明確化、カリキュラムの工夫、個々の習熟度や学習方法など個々の生徒の特性に応じた対応が必要である。

○生徒の持っているこれらの多様な側面、それに基づく多様な学習ニーズに応える効果的な教育課程を編成していくためには、職員全体が夜間中学の教員としてのスキルアップを図り、学習シラバスとカリキュラムの改善に取り組んでいかなければならない。

○生徒の学校生活に目を向けると、お互いの意思疎通や共感・理解について、背景・文化・価値観・母

語の違いによって生じる課題が見られる。この問題の解決のためには、生徒どうしが積極的に関わりを持ち、互いの違いとその背景を十分に認識しつつ、ともに学ぶ仲間として結びついていけるような仕組みを教育課程の中で工夫することも大切なことである。

○これらの問題意識・課題を解決する一つの方法として、校外学習の実施を用いることとした。

創出した先進事例

◆実施に向けて検討した方策とその分析

○大人の生徒にとっての効果的な校外学習の在り方についての検討

→教職員による検討会議を持ち、学校外で具体的事物に触れて学習する目的・意義を確認した。

◇教室での学習内容や大人としての見聞・経験を深める ◇職場や地域などの社会生活で求められる集団行動を身につける ◇地域に戻って積極的に参画できるための経験を積む ◇日本社会事情の理解を深める

○大人の生徒がこれらの目的・意義を達成するための課題の検討

→生徒の学習・生活状況について担当教員から報告を受け、生徒の背景と課題を教職員で共有した。

◇学習歴や学齢期に教育を受ける機会を十分に保障されなかった理由 ◇生活・経済状況や就職の有無 ◇来日理由 ◇母語・第1言語と識字・日本語の能力 ◇その他、宗教・思想・食事制限・アレルギー等の配慮を要する事柄

○生徒の背景と課題を考慮した計画についての検討

→教職員による検討会議を持ち、必要な配慮について確認した。

◇日本社会事情を理解することのできる社会見学（訪問先）や体験学習であること ◇経済的負担を考慮すること ◇仕事があっても参加が可能となるよう日程を早期に伝達し調整を可能とすること ◇大人の生徒の生活とつながりのある社会見学（訪問先）や体験学習であること ◇多文化共生の状況が実感できるよう工夫すること ◇生徒相互の理解促進と交流を深めること ◇交流を含めたグループ活動を行うこと ◇食事制限を相互に理解し配慮すること ◇言語習得状況など識字・日本語学習者への支援を行うこと ◇多言語による学習補助や通訳補助を行うこと ◇訪問先での事物と大人の社会生活との結びつきがわかるよう工夫すること ◇職業などの進路につながるよう工夫すること ◇訪問先での学習を促すための簡易なワークシートを作成すること ◇事後の学習とするため感想文を集約すること

◆実際に行った方策

○計画策定

○バス会社の相見積りと予約

○訪問先の選定

◇名古屋城・本丸御殿 ◇矢場味仙（昼食） ◇トヨタ産業技術記念館

○目的

◇日本の歴史的建造物文化財に触れる ◇地域を代表する食事となった「味仙」から多文化共生を学ぶ ◇日本の繊維機械や自動車の産業技術の変遷を学ぶ ◇生徒相互の交流を図る

○日程の早期伝達（生徒へのシフト調整依頼）

○校外学習の意義・目的・訪問先の多言語での説明(非常勤講師等の協力)

○検討会議（全2回）

◇目的と意義の確認 ◇生徒背景と課題の共有 ◇配慮すべき事柄の確認（宗教・思想・食事制限・アレルギー等） ◇計画のブラッシュアップ

○下見

◇減免措置手続き ◇行程と運営・役割分担の確認 ◇多言語対応の確認（多言語パンフレット・多言語音声ガイダンス） ◇食事制限への対応確認

○事前学習（全2回）

◇Google アースや地図アプリを利用した訪問先・行程の確認 ◇地理の把握 ◇訪問先のホームページの閲覧と説明（名古屋城・味仙・トヨタ産業技術記念館） ◇校外学習の学習目的・学習ポイントの解説（文化財・歴史・文化・地域における多文化共生・繊維機械と自動車の変遷など） ◇翻訳機と Google Chrome を活用した多言語（5カ国語）でのサポート

○昼食の事前注文（ヒンドゥー教やイスラム教の禁忌、アレルギーや思想などの食事制限に対応）

○昼食代金への補助（経済的負担減のため）

○校外学習参加への補助（経済的負担減のため）

○ワークシートの作成と使用（グループ活動での現地学習を促すため。「やさしい日本語」使用。）

○訪問先での多言語音声ガイダンスの利用

○感想文の集約

○作文指導

◆生じた成果・効果

○名古屋城・本丸御殿を訪れ、日本の歴史的文化財に触れ、日本文化への理解が深まった。

○名古屋めしとなっている味仙で昼食をとることで、地域の文化として溶け込んだ多文化共生を感じ取れた。本校には、インド・ネパール料理店で働いているネパール人生徒も多く、地域に根付いている味仙のようすに学ぶことは多かったようである。

○多様な食事制限があることへの理解が深まった。

○トヨタ産業技術記念館で糸繰りや織機の展示を見学し、ネパール人生徒と中国人生徒が幼い頃から糸繰り等に携わっていたことがわかった。そのことを全員で共有することにより、より深い交流と学びになった。生徒の生活が文化や産業とつながっていることが実感でき、大人としての生活に対する自尊感情の伸長に役立った。

○校外学習の結果、生徒が自己をふりかえり、作文を綴り発信するアウトプットの学習につながり、自尊感情が高まる機会となった。そうした生徒のようすが、周りの生徒の自尊感情を高める学習へもいい影響をおよぼすことになった。

○多様な背景を持つ生徒どうしの交流が深まり、生徒の学校生活にもいい影響が出ている。

◆課題

○今回、校外学習終了後に生徒全員に感想文を書いてもらったが、作文の形で発信するアウトプットの学習につながったのは3人であった。生徒全員に、作文の形にとらわれず、何らかの形で発信してもらえるよう取り組む必要がある。

調査研究を踏まえた今後の取組方針

○校外学習を受けて綴られた生徒の作文において、学齢期に校外学習の機会が持てず、社会についての理解が深まらないまま現在に至っていることを惜しんでいるという記述がある。これは、様々な理由で学ぶ機会を逸している大人である夜間中学の生徒にとって、現在行っている校外学習での学びが大きな学習機会・学習経験であることを意味している。引き続き、大人の生徒にとっての効果的な校外学習の在り方について改善を図りながら、今後も夜間中学における校外学習を実施していきたい。

○校外学習で学んだことやそのことから自身の生活等を掘り起こして作文に綴ることは、セルフエスティームの伸長や様々な学習への波及効果も高いため、引き続き取り組む。また、作文だけではなく、例えば、文化祭での発表や展示等の作成等、校外学習に参加した生徒全員が何らかの形で発信していけるよう、教育活動全般にリンクする校外学習としていきたい。

○大人の生徒が効果的に日本社会事情を理解する社会見学や体験学習となるよう、大人としての見聞・経験を深める具体的な訪問先の選定、生徒の経済的負担、多様な違いを持つ生徒どうしの理解・共感・結びつきを深める工夫、識字・日本語学習者の言語習得状況等への考慮と支援などについて、引き続き検討していきたい。

【調査研究事項Ⅳ】

その他夜間中学における教育活動充実に関すること

奈良県橿原市教育委員会

「研究テーマ」

- ①不登校を経験している学び直しの生徒、高齢で一人暮らしの生徒、言葉や習慣の違いなどで家庭や地域職場で課題がある生徒の中で、夜間中学での学習の継続と目標の達成のために、メンタル面でのサポートが必要な生徒の受入れ体制の充実
- ②生徒の経済的負担に考慮しながら、地域社会の夜間中学理解や市民とのつながりを深める校外学習の工夫

調査研究のねらい

研究テーマ①について

本学級では、他の夜間中学同様、既卒者で学び直しを希望する生徒が、年々増加傾向にあります。入学予定で現在体験学習中の生徒や入学希望で学校に問い合わせがある人たちの中にも、学び直しを希望する人たちの数が顕著に増加してきています。これらの人たちは共通して学齢期に不登校や引きこもりを経験していて、その原因が、いじめ、家庭環境、周囲の大人たちの不理解などにあります。本来、学齢期に学校や家庭、地域社会とのかかわりの中で、身につけられる社会性や人とのつながり、生きるための知識といったことを学ぶ機会が失われたまま成人したため、これらの人たちの多くは、成人になってからも生活のさまざまな場面に困難に直面し、心に傷を受け、精神的な疾病を発症したり、障害を負ったりしています。本校夜間学級の既卒者生徒や体験入学者についても、ほとんどがこのような経験を持つ生徒です。また、本学級には、高齢の一人暮らしで、家族とのつながりが少なく、家族からの生活上のサポートもほとんどなく、地域社会からも孤立しがちで、精神的にも非常に不安定な状況にある生徒も在籍しています。さらに、20代～50代の外国人定住者の生徒で、地域や職場、また家庭での子育ての場面などで、日本語の習熟度の問題や文化的社会的な価値観の違いなどから、人とのコミュニケーションに問題を抱え、精神的に大きなストレスを抱えながら通学している生徒も数多く在籍しています。

本校夜間学級の教育の最大の目標は、「生徒が夜間中学で安心して学校生活を送り、なかまと共に学ぶことを通じて、それぞれの具体的な目標を達成することで、生存権や幸福追求権といった人権を取り戻す」というところにあります。その目標を達成するためには、特に、上記の背景を持った生徒の場合は、教員が、細心の注意を払い、生徒の生活の相談や身の上話に耳を傾け、関係機関と連携をしながら、様々な生活上の不安の解消に向けた取組が重要であると考えています。そのため、本研究委託事業において、生徒のメンタル面でのサポートや関係機関との連携のサポートなどに専門性を持った職員を配置し、該当生徒と担当教員との相談や問題解決のための方法や工夫についてのサポートを実施する取組をおこないます。

研究テーマ②について

本校夜間学級では、この3年のコロナ禍の中で、経済的に困窮し、夜間中学での学びを継続すること自体が難しくなっている生徒が複数存在しています。特に顕著に見られる傾向として、非正規雇用の形態で飲食業やサービス業に従事する生徒の場合、顧客の減少によって、解雇や労働時間の短縮などで、家族を守り生計を立てていくことになかなりの困難を感じている実態があるということが挙げられます。そのため、費用の自己負担が大きい学校行事への参加が難しくなるケースが多くなっています。

とりわけ、なかまといっしょに時間を過ごし、結びつきを強めながら、実体験を通じて学ぶ校外学習については、生徒が参加するにあたっての負担額が大きく、参加者が減少していました。また、コロナウイルス感染予防のため、地域市民とのつながりを深めるための取組も、中止や延期、参加人数や実施方法に制限を加えて実施するなど、十分な取組ができなかった経緯もあります。そのため、昨年度は本事業において、7月末に民間のバス会社からマイクロバスを賃借し、日頃から本校夜間学級の教育活動を支援いただいている市民団体「檀原に夜間中学をつくり育てる会」の会員の方々との合同校外学習の実施を計画し、採択されました。しかし、時期的にコロナ感染の第7波に入り、感染が命の危険に直結する持病をもっている高齢生徒も多いことから、計画を中止せざるを得ませんでした。この計画は、生徒と職員、市民の直接交流に特徴があり、市民が夜間中学を理解することや、学校と市民のつながりを深めることに対して非常に有効だと考えておりますので、今年度において実施します。

創出した先進事例

研究テーマ①について

事業計画に従い、以下の取組をおこなった。

- * 6月の職員会議にて、2名のコーディネータを決定。
- * その後、コーディネータより、スクールカウンセラー（SC）活用について意義・方法・評価方法・成果の発表方法について提案、職員会議にて、検討。教員間の共通認識の形成。
- * 市教委からハローワークを通じ、SCを市の会計年度職員として公募後雇用開始。
（7月～2月計8回、月1回、1回3時間〔18:00～21:00〕、時給単価は檀原市教育委員会会計年度任用職員給与等規則のスクールカウンセラー単価とし事業計画の金額から変更）
- * 発達障害の特性が見られ、日常的に生きづらさを感じ、精神的に不安定になりがちでメンタル面でのケアの必要性が高い5人の生徒を対象に以下の手順パッケージで毎回のカウンセリングを実施。
 - a準備；担当教員による、相談前のアセスメントシートの作成と教員間・SCとの情報共有
 - bカウンセリングの実施；間接相談【対 教員・保護者】、直接相談【対 該当生徒】
 - c直接相談後の結果のフィードバック【SC→該当生徒の教員】
 - d相談翌日の打ち合わせで、相談内容について教員間で情報共有
- * カウンセリング最終回に、SCにコーディネータから今後の対象生徒の対応についてのアドバイスを得たと同時に、今年度のSC活用についてのSCの立場からの評価を得た。
- * 2月末職員会議にて、取組の成果と課題を検討後、3月初旬実施の奈良県夜間中学研究大会において事業の成果と課題を発表し、県内夜間中学関係者間で、情報の共有。

【成果と課題】

（成果）

- * 毎回担任が、アセスメントシートを作成し、SCへ事前に担任から相談内容を伝え、相談のスケジュールも組んでおいたことで、年間8回、一回につき3時間という限られた時間を有効に使用しカウンセリングを実施できた。
- * カウンセリングの形態を、一つに限ることなく、SCと対象生徒の直接相談、直接相談後のSCから担任へのフィードバック、SCと担任との間接相談など、それぞれの回の必要に応じてさまざまな形態を取り、カウンセリングのスケジュールもコーディネータが事前に調整しSCと情報の共有をおこなったり、事後の教員間のカウンセリング結果の共有をおこなったりしたことで、教員とSCが連携することができた。組織としてSCを有効に活用するための方策を模索することができた。
- * SCの直接相談後のフィードバックの内容の職員間の情報共有ができたことで、カウンセリング後の担任及び他の職員の対象者への日頃の接し方の工夫が見られた。
- * SCとの相談がなければ、非常に困った事態（通学できない、仕事を辞める、引きこもりを繰り返す、教員との良好な関係が保持できないなど）を招いていたことが予想された。しかし、対象生徒について職員の気がつかなかったことや発想できなかったことへのアドバイスもあり、一定、対象生徒は安心して通学を継続でき、仕事や家事、子育てなど日常生活での不安もその都度クリアしながら、生活を続けられている。

（課題）

- * 月一回、一回3時間というカウンセリング時間では、生徒さんとの直接相談も担任との間接相談も時間的に制約が多く、十分に相談時間が確保できたとはいえ、SCと相談対象者との関係性の深まりが少なかったことや、カウンセリングの継続性が確保できなかった。また、時間に余裕があれば、昼間の学齢期の子どもSCと同様に、カウンセリングの空き時間を作り、教室に入り、対象の生徒の様子や学習環境を分析した上でカウンセリングにのぞめたのではないかな。

研究テーマ②について

事業計画に従い、以下の取組をおこなった。

訪問地と活動内容；

奈良県南部の自然豊かな黒滝村森の交流館を訪れ、市民との交流行事を実施する

交通手段；民間のバス会社から賃借したマイクロバス

参加者；生徒、檀原に夜間中学をつくり育てる会会員、教員(引率)

実施日；2023年8月6日（日曜日）

- * 6月に、校外学習実施担当者2名を決定し、市民団体である檀原に夜間中学をつくり育てる会役員と連携しながら、当該訪問施設、バス会社との連絡調整、活動内容の詳細案の作成、及び職員会議での提案検討をおこない、7月に参加者募集開始。
- * 8月6日、行事实施。生徒9人、育てる会10人、職員9人、計28人が参加。
- * 9月当初の職員会議にて、取組についての成果及び改善点の検討。

【成果と課題】

（成果）

- * コロナ感染症の扱いが第5類感染症扱いに移行され、学校行事における様々な規制も緩和されたこともあり、今年度は事業計画通りに、令和5年8月6日（日）に校外学習を実施することができ、参加した生徒も市民も生き生きとした活動の様子が見られた。
- * 今回の校外学習実施にあたっては、「経済的に困窮している生徒の費用負担を軽減し、生徒の積極的な学校行事への参加を促す。」ことを目的にしていたが、参加した9人の生徒は、ほとんどが、通学定期を短い期間でしか購入できないことや、生徒会活動などのための費用の自己負担ができないこと等から、学校の教育活動に参加自体が難しい生徒であったことを考えると、目的は一定程度達成できた。
- * 行事終了後の参加生徒の感想の中には、「奈良県に長く住んでいるが、初めてきた。」「一人では行けないところに、無料で学校のみんなと行けて良かった。」「また行きたい。」「お金も高いし、一人ではなかなか行けないけど学校のみんなとだから行ける。」などの感想が多かったことを見ても、全国夜間中学研究大会奈良大会などの2学期以降の行事参加へのモチベーションも高まったと考えられる。
- * 今回の校外学習のもう一つの目的であった「生徒と地域市民が、黒滝村の自然の中で一緒に活動し、直接交流をすることで、市民の夜間中学理解と学校と市民のつながりを深める。」というねらいについては、市民団体「橿原に夜間中学をつくり育てる会」の会員が持参した食材を使用し、5つのテーブルに数人ずつ分かれて、調理作業を協働でおこない、できあがった物を共に食事しながら語り合う時間を取ることで、参加者同士が立場を超えて、互いの学習や生活のこと、夜間中学の歴史や過去の思い出など、普段の授業の中ではなかなか話す機会のない様々な話題を聞くことができ、個人的な内容がそれぞれのグループ全体の興味事になっていく様子もうかがえたことから、達成された。

調査研究を踏まえた今後の取組方針

研究テーマ①について

- * 今回の調査研究を通じて、学校が組織としてSCをどのように活用すれば、効果的な力カウニングを実施できるのかの一定の方策を模索できたので、来年度以降の取組に反映させていきたい。しかし、今回雇用のための予算と雇用できた時間の問題から、カウニングの継続性と充実度には最善の余地があるため、さらに雇用時間を増やした形での調査研究をしていきたい。
- * 今年度カウニングの対象となった生徒以外に、子育てに悩みを抱えている外国籍のシングルマザーの生徒や高齢で一人暮らしの生徒が多数在籍している。その人たちには、夜間中学での学びを継続するには、生活や子育てのサポートや将来の生活も見据えて、福祉や医療的ケアの必要な人も複数いる。今後は、それらの生徒の担当教員と相談しながら、一緒に生徒の状況を分析し、生徒の対応や必要な関係諸機関（学校、生徒の家族、福祉、医療等の機関）との連携について担当教員へのアドバイスをとおこなったり、ケース会議などを開催し関係諸機関と学校との橋渡しをおこなったりしていただけるスクールソーシャルワーカー（SSW）の活用についての調査研究もおこなっていきたい。

研究テーマ②について

*特に公立夜間中学では、時代が変わると、生徒も教員も入れ替わるため、創設した頃の市民や行政の方々の志を継承していくことが難しいという現実がある。しかし、今回のこの校外学習の取組は、上記の様子から、生徒、教員、学校を支える地域市民が、自然な形でコミュニケーションを取りながら、親睦を深め、立場を超えて夜間中学の存在を認識、共有する仕掛けとして十分に有効に働いたのではないかと考える。今後、生徒の背景の変化、檀原に夜間中学をつくり育てる会会員の高齢化、教員の入れ替わりなど、様々な要素を考慮しながら、校外学習という機会を活用し、同様の取組を継続していきたい。

事業成果報告書

調査研究事項等

調査研究事項	委託研究:夜間中学における教育活動充実に係る調査研究 «広島市立二葉中学校» VI その他夜間中学における教育活動充実に関すること
調査研究のねらい	○ 生徒が日本社会に適応し、自立した社会生活を営むために、地域交流を行い、地域住人との交流の中で必要な力を身に付けられるように研究する。 ○ 生徒の中には、生育環境・生活状況に様々な事情を抱えている人もいることから、生徒一人一人の状況把握を教諭、スクールカウンセラー等と連携を図りながら、それぞれの生徒に合った学習を尊重できるように、受入体制や指導方法の在り方について研究する。 ○ 経済的負担を考慮した上で、実生活に活かせる効果的な校外学習等の在り方について研究する。
調査研究の成果	«広島市立二葉中学校» 1 調査研究の実施内容 【4月】・ 第1回研修会 各生徒の学習及び生活の状況について情報交流を行い、新年度の指導計画について研修した。 【5月】・ 第1回検討会議 新入生2名の生育環境・入学までの学習歴・生活状況・入学後の学習状況等について情報共有を行い、今後必要な支援について検討した。 【6月】・ 第2回検討会議 登校状況の変化した生徒を中心に生活状況等の実情把握に努め、今後の指導方針について検討した。また、生徒の実態に合った地域交流の実施に向けて、内容・時期・講師等について検討した。 ・ 校外学習 新型コロナウイルス感染症感染拡大対策に努めながら、中型バスで豊平どんぐり村へ行き、楽しく蕎麦打ち体験を行った。天候に恵まれ、仕事を調整した多くの生徒が参加できた。日本の文化や自然に触れ、交流会で仲間との親睦を深めることができ、非常に有意義な校外学習となった。 【7月】・ 第2回研修会 個々の生徒の学習状況や習熟度等について情報交換を行い、現状の把握に努めるとともに、各教科の指導方法や教材について交流した。

	【8月】・教材の作成 ペアでのQAやインタビューなど会話練習教材や非漢字圏出身生徒も段階的に学習できる漢字教材などの作成に努めた。また、今年度は多数の高校進学希望者がいたため、進路学習教材を多言語で作成・準備した。 【9月】・夜間学級連絡会① 実施されなかった。 ・作成した教材を用いた授業研究 昨年度に引き続き、日本語授業で学習内容に応じたペア練習やロールプレイ、インタビューなど「話す」「聞く」活動を取り入れ、更に「書く」活動も増やすよう取り組んだ。また、日本語授業の中でも漢字学習に継続的に取り組むことで、非漢字圏出身生徒が抱えている漢字に対する苦手意識を少しずつ軽くできるよう工夫した。継続的に取り組むことで、生徒自身も面白さに気づき、学習意欲の向上につながっている。 【10月】・第3回研修会 各生徒の前期の学習状況を確認し、後期の指導内容について検討した。また、新入試制度の一部変更や高校受験希望生徒に対する取組についても確認した。 【11月】・異文化交流体験学習 日本の歌を中心に様々な国の歌や季節の歌について学び、異文化理解を深めるよい機会となった。また、生徒もウクレレで伴奏しながら合唱して参加し、日頃の音楽の学習成果を発揮できた。 ・地域交流体験学習 地域の方が講師となって、日本語の指導による茶道を体験した。初めて抹茶や生菓子をいただく生徒がほとんどで、日本の伝統文化に触れるよい機会となった。ゆっくり分かりやすく丁寧に指導してくださり、楽しく交流できて有意義な学習ができた。 【2月】・第4回研修会 各学習グループの学習指導・生徒指導及び進路指導等について、今年度の成果や課題を検討した。 ・夜間学級連絡会② 夜間学級の現状や入級希望者に関する情報交換を行った。 【3月】・第3回検討会議 新入生の状況や来年度の学習グループの編成等について検討した。 ・第5回研修会 今年度の成果と課題をまとめ、来年度へ向けての準備を確認した。
--	--

2 調査研究の成果

- 今年度も日本・中国・ネパール・フィリピン・ブラジル・インド・ペルー7カ国の生徒が学習しており、生徒の日本語力や各教科の学習状況、卒業後の進路希望等により、日本語基礎・日本語発展・教科基礎・教科発展の4学習グループに編成して、指導した。日々の日本語授業では、テキストに基づいた学習を中心に基本的な学力の定着を図っている。今年度は、地域の方を講師に招聘し、日本の茶道について日本語で学び、交流する機会を設けた。テキストはなく自分の耳だけを頼りに、初対面の日本人が自然に話す会話を聞いて理解する体験は、授業とは違う緊張感を持ちつつも、周りとの交流しながら日本語を理解し、楽しむことができ非常に有意義だった。将来いろいろな生活場面で、自分の日本語力で対応していけるように、今後も更に学習に取り組もうと意識することができた。
- 日本人生徒2名はどちらも精神的に不安定なため、学習グループも日本人生徒だけで編成し、教室が安心していられる場となるよう配慮した。3年生の1名は入学当初より将来カウンセラーになりたいと希望しているため、進路学習的な効果もねらいスクールカウンセラーのお話を聞くという機会を設けた。その中で、実際にカウンセラーになる場合に自分が持つ課題も次第に理解し、卒業までに今の自分が頑張れることを決め、登校や学習に取り組むことができた。
- 今年度は借り上げバスの使用により、生徒は交通費無料で校外学習を実施でき、多くの生徒が仕事を調整して参加した。豊平どんぐり村では、日本語で蕎麦打ち体験担当者の指導を受けて日本の伝統食である蕎麦を生徒皆で協力して作り、その後の交流会では日本語で楽しく交流しながら自分たちが作った蕎麦を食べる経験ができた。餃子やナン等生徒の国の粉料理とは違い、薄く伸ばして折り返し幾層にも重ねて更に伸ばしていくための綿棒の使い方を覚えて、日本の麺も材料があれば手作りできることが分かり、日本の食文化を身近に感じるようになった。
- 地域交流においても校外学習においても何より生徒にとって最も大きな成果は、初対面の日本人の自然な日本語を聞き取り、交流することができたという経験である。これまでの学習が身について実際に役立つということを生徒自身が実感でき、今後日本で様々なことに挑戦しながら生きていける自信となった。